

携帯メールにおける断りの機能の構成 —タイ人日本語学習者と日本語母語話者を比較して—

メググリアングライ ポンティパー

要 旨

本稿では非対面コミュニケーションの効果を高めるために、相手への配慮の必要があるとされている「断り」場面を取り上げ、日本語母語話者 (JNS) とタイ人日本語学習者 (TNS) がどのように日本語でメールのやりとりをしているかに着目し、その特徴を明らかにすることを目的とする。調査の結果、JNS と TNS の両者の共通する点は断りの中心部分が [言い訳] と [不可] から成ることが確認できた。また、その中心部分の前後に、相手優先の気持ちが表されている [共感] と、次に機会があれば一緒に行動したい気持ちを示す [関係維持] の使用が見られた。つまり、断りは義務的要素 ([言い訳] と [不可]) と付随的要素 ([共感] と [関係維持]) の 2 つの要素で構成されていることが明らかになった。一方、JNS の特徴としては [謝罪] と [好意的反応] の多用が挙げられ、TNS の特徴としては [情報提供] が挙げられる。

【キーワード】携帯メール、断り、タイ人日本語学習者

1. はじめに

21 世紀に入ってから日本では若い世代を中心に、携帯メールの使用が急増しており、現在では携帯メール (以下メール) が浸透して、若者のコミュニケーション手段として、欠かせない存在になってきている (中村 2000)。しかし、タイでは携帯電話 (スマートフォンを除く) にメール機能が付いている場合が極めて少ないため、タイ人留学生においては、来日した際に、初めてメールを使い始める人が多いと考えられる。慣れない非対面コミュニケーションで彼らはどのようにやり取りをするのであろうか。

また、私たちはそれぞれが生まれ育った文化・社会環境に相応しい方法で、互いの存在を認め合いつつ、自分自身のメッセージや言語行動の目的等を有効的に伝達し、かつ相手との良好な人間関係 (効果的なコミュニケーション) を保持しようと試みる。しかし、このような効果的なコミュニケーションは、同文化圏の会話者同士であれば、同じ様な配慮の仕方 で通じ合えるであろうが、異なる文化や習慣を持つ会話者であれば、摩擦やズレが見られる可能性がある。特に、相手の気持ちを傷つけないよう配慮の必要がある「断り」場面は、配慮を示す断り表現が文化・習慣的な要素によって異なるため、異文化間コミュニケーション場面では誤解を招き、効果的なコミュニケーションができかねるようなことがしばしば観察される。

そこで本稿では非対面コミュニケーションの効果を高めるために、「断り」場面を取り上げ、日本語母語話者 (以下 JNS) とタイ人日本語学習者 (以下 TNS) はどのようにメールのやり取りをしているかに着目し、その特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

2.1 「コミュニケーション機能」及び「機能的要素」

熊谷・篠崎 (2006) は、言語行動には、依頼や断り、説得、謝罪など様々な種類があるが、そのいずれにおいても、話者は二つのことに考慮をしているのではないかとされるという。それは、熊谷 (2000:109) が言語行動における二つの指向性として述べた、「当該の言語行動の目的を効果的に達成すること」と「相手との対人関係を良好に保つこと」である。

例えば謝罪を述べる場合には、言語行動の目的達成が、同時に対人関係を良好に保つことにつながる。一方、言語行動の目標を達成させると共に、人間関係を悪化させる可能性がある場合もある。後者の場合は二つの指向性を両立させることが容易ではないと思われる。例えば断りを述べる際は、自分の意志を伝えるという行動の目的がきちんと達成されると同時に、なるべく相手の感情を害しないようにする必要もある。そこで話者は、両者のバランスをとりつつ、双方をなるべく満たすよう、工夫や配慮を行

っているのではないかと考えられる。その一例として、敬語の使用や、何かを説明する際に相手に分かりやすい用語や言い回しを選ぶこと等は工夫の仕方であり、内容をより伝えるという目的達成と、受け手の精神的な負担を軽減するという両面への配慮となりうる。

熊谷・篠崎（2006）は、話者の配慮のあり様を観察する上で一番大切なのは言語行動における「働きかけの仕方」だと述べている。つまり、断る際にお詫びの言葉を述べるか、用件のきりだし方や話の進める順番はどうなっているかなどを通して、行動の仕方や方略の選択といった形で配慮の具体的なあらわれを見ることができるのではないかと考えられる。それらの配慮の行動を解明するために、熊谷・篠崎（2006）が用いたのは「コミュニケーション機能」及び「機能的要素」である。熊谷・篠崎（2006）によると、「コミュニケーション機能」及び「機能的要素」の定義は次の通りである。「コミュニケーション機能」とは「個々の機能的要素を、当該の言語行動においてどのような役割を担っているかという観点からグループにまとめたもの」であり、「機能的要素」とは、呼びかけ、説明など、「相手に対する働きかけの機能を担う最小部分」（熊谷・篠崎 2006:22）のことである。つまり、言語行動において、同じ様な役割を果たしている機能的要素をまとめるものはコミュニケーション機能である。

本稿では「コミュニケーション機能」及び「機能的要素」の観点から日本人とタイ人が非対面コミュニケーションにおける「断り」行動を行う際に、どのように目的を達成し、人間関係を良好に維持するかを明らかにするために、上記の熊谷・篠崎（2006）を参考にしながら、分析を試みる。

2.2 「勧誘」に関する研究

スニサー（2006）では日本人とタイ人の「依頼・勧誘」行為の違いについて、日本人とタイ人の「謝罪」の出現件数に差が大きいと述べている。その理由として、日本人とタイ人の「依頼・勧誘」行為への認識の違いによるものと指摘している。つまり、日本人は「依頼・勧誘」行為自体に負担を強く感じるため、その行為の内容に関わらず、「依頼・勧誘」行為によって相手が負う負担に対して、「謝罪」が多く使用されているだろうと述べている。

2.3 「断り」表現に関する研究

まず、タイをはじめとする東南アジアの日本語学

習者における「依頼と勧誘に対する断り方」を扱った研究として、カノックワン（1997）の研究が挙げられる。この研究は学習者の断り場面での自然談話（電話会話）に見られる「断り」の中心構造である「理由」「不可能」表現に着目し、学習者の日本語には日本語母語話者が使う「ちょっと…」「…かな」のような付加表現の使用が少ないことを明らかにしている。

ルンディーラ（2004）は、タイ人日本語学習者の「提案に対する断り表現」に関し、発話の内容に着目し、日本語とタイ語の両言語による談話完成テスト（Discourse Completion Test）でデータ収集を行い、Beebe et al.（1990）の「意味公式」を用いて対人関係別使用パターンを分析した。その結果、日本語母語話者のデータと比較し、パターンの使い分けが日本語とタイ語とでは異なる点が見られ、学習者の日本語は母語であるタイ語に近い使い分けをしていることを報告している。また、「親しさ」と「上下関係」がもたらす断り表現の違いの傾向が日本語とタイ語とで異なることから、母語からの転移の可能性を指摘している。

タイ - 日の日本語接触場面における「誘い - 断り」に関しては、ナッタモン・加藤（2010）が挙げられる。この研究は Brown & Levinson（1987）のポライトネス理論を理論的枠組みとして取り扱い、ロールプレイ形式でデータを集めた。そして、タイ人日本語学習者の日本語接触場面でタイ語母語場面と比較し、「誘い」の発話行為を行うタイ人のインターアクション行動や、タイ語母語場面との相違から生じる発話行為運用上の問題点を明らかにしている。その結果、接触場面と母語場面とでは「誘い」の発話行為に大きな相違点が見られなかった。しかし、タイ語母語場面における「断り」の発話行為に関しては、接触場面と比べて Bold on record（ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを用いず直接的に断ること）を行う可能性がある。その上、接触場面で日本語母語話者が断る側の場合、断られた側のタイ人日本語学習者によるポライトネス・ストラテジー（断る理由の詳しい情報要求など）の使用が日本語母語話者に否定的に評価されたことが見られたと報告している。その理由として日本人は親しい間柄であっても自分のネガティブ・ポライトネスを保持しようとする意志が比較的強いのに対し、タイ人は相手との距離を縮小しようとするポジティブ・ポラ

イトネス保持の傾向が強いと考えられるとしている。

2.4 メールの談話分析に関する研究

吉田さち (2009) は、韓国人日本語学習者のメールにおける「断り」をコミュニケーション機能・機能的要素という概念を用いて分析した。その結果、韓国人日本語学習者は日本語母語話者と比べて直接的表現を避ける傾向と、理由を言う場合に本心を使うのを避ける傾向が見られた。また対人配慮の面では韓国人日本語学習者は日本語母語話者と比べて、相手優先の気持ちが表されている「共感」の使用や、積極的に具体的な提案を提示せず、次の機会に一緒に行きたい気持ちを示す「関係維持」の使用が多いが、「謝罪」は日本語母語話者と同じくらい多用していると報告している。

「断り」表現の理由の述べ方をロールプレイ対話とメールとで比較する研究としては、稲垣 (2007) の研究が挙げられる。この研究は、日本語母語話者の、相手による断り方の方法の違いや、断り方のヴァリエーションとその原因について調べた。その結果、断りやすさの観点からは、断り方を決める際に、「上下や親疎は重要な要素ではあるが、断りやすさや嘘をつかはそのような相手との単純な関係性だけでは決まらない」(稲垣 2007:75) と述べている。また、理由の述べ方の観点からロールプレイとメールを比較したところ、次のようなことが分かった。共通点は、理由を述べる時に用いる言語形式として最もよく使われるものは「～から」、「～し」と「～ので」であるのに対し、相違点は、対面とメールでは同じ相手に対してでも、多く使われる形式には違いがあることである。

しかし、上記の「断り」表現に関する研究及びメールの談話分析に関する研究では、分析データとして談話完成テストが用いられていることや、設定された勧誘のメールに対する返信を書かせる課題タスクなどを用いたものが大半であるが、これらは実際の相手ではなく、設定された架空の人物を相手に、メールを書くことが多い。これは、実際の場面でのやりとりでは同じような言語行動を行っているのが定かでない点に問題があると考えられる。また、携帯メールの研究で対象としたデータは日本語母語話者を中心としており、日本語非母語話者に関する研究は管見の限りまだ少数である。

そこで本稿では先行研究の結果を踏まえた上で、実際の勧誘場面での断る側の言語行動が見られるロ

ールプレイデータを使用し、タイ人日本語学習者及び日本語母語話者を研究対象とし、分析を試みる。

3. 研究方法

3.1 データについて

研究対象者は日本語母語話者 (以下 JNS とする) 30 組、タイ人日本語学習者 (以下 TNS とする) 30 組、計 60 組、全員同性の友達同士の大学・大学院生で、年齢は 19～29 歳である。また、TNS の日本語のレベルの差による影響を軽減し、円滑な日本語での携帯メールのやり取りができるようにするために、対象者が日本語能力試験 2 級以上の者に限定した。

データは同等関係の日本語での携帯メールロールプレイデータを使用し、場面は日常生活でよく起こりうる「勧誘に対する断り」に設定した。また、本稿では「断り」に関する言語行動を中心に観察していくため、断る側のロールカードにあえて「どうしても行けません」と強調した。ロールカードは以下表 1 の通りに作成し、TNS にはタイ語に翻訳したロールカードを使用した。

表 1 ロールカード (日本語版)

A (誘う側) : あなたが前から見たいと思っていた映画が今週末に上映されることになりました。あなたは今週の土曜日から日曜日に、友達と 2 人でこの映画と一緒に見に行きたいと考えています。
B (断る側) : あなたは、友達から映画の誘いを受けます。しかし、あなたは何らかの理由で、どうしても行けません。

3.2 調査手順

本稿では、JNS にも TNS にも、調査を開始する前に本研究の目的や調査手順を説明し、転送された携帯メールのデータは研究目的にのみ使用することを事前に伝え、同意を得た上でロールプレイを開始した。尚、JNS にも TNS にも、同性の友達同士で、普段よく話している相手とペアを組んでもらい、1 組ずつパソコンのメールで指示を与えた。なるべく自然なやり取りを得るため、協力者には「普段通りでやり取りを行って下さい」と指示し、携帯メールでやり取りを行ってもらった。やり取りが終わった後、全てのメールを筆者に転送してもらった。

3.3 分析対象

「断り」コミュニケーションの中では断り表現が

数回出てくる可能性があるが、本稿では、勧誘メールの直後に出てくる最初の「断り」のメールを対象とする。

尚、本稿では「断り」のやり取りのみを重視し、分析を行うため、言葉遣いの丁寧さ、方言の使用、及び顔文字や絵文字などといった絵記号を分析対象から外すこととした。

3.4 分析枠組み

分析枠組は、熊谷・篠崎（2006）で用いられた「コミュニケーション機能」及び「機能的要素」を援用し、適性化したものを使用する。本稿で使用する「コミュニケーション機能」及び「機能的要素」の各種類の定義は、稿末資料1の通りとする。

しかし、本稿では「コミュニケーション機能」の下位分類である「機能的要素」に焦点を当てて分析を行うため、今回は「機能的要素」を中心に分析し、考察を試みたい。

3.5 コーディングの手順及び分析手順

コーディングは、対象となる「断り」のメールに、「機能的要素」を当てはめたあと、「コミュニケーション機能」のカテゴリーに分類するという手順で行った。それから、それぞれの「コミュニケーション機能」と「機能的要素」がそれぞれどの程度で使われているか（以下使用回数）を計測し、JNS と TNS の特徴を見出していく。例えば、次の会話例(1)のように、下線①「ごめん〜」は[謝罪]¹、下線②「来週アタマに、セミナーがあるから」は[言い訳]、下線③「無理そう」は[不可]、下線④「今かなりテンパリ中」は[周辺状況]、下線⑤「再来週なら大丈夫だけど、どうかしら」は[代案提示]とコーディングする。

分析手順はそれぞれコーディングされた「機能的要素」と「コミュニケーション機能」の使用回数を延べ回数で数え、JNS と TNS の使用回数の平均値の比較にt検定を採用し、比較することとする。

(1) JNS2: ①ごめん〜[謝罪]¹
②来週アタマに、セミナーがあるから
[言い訳]③無理そう[不可]。④今かなり
テンパリ中[周辺状況]⑤
⑤再来週なら大丈夫だけど、どうかしら
[代案提示]²

4. 結果

断りのメールにおける JNS と TNS の機能的要素の使用回数を比較し、分析を行った。対象のメール

総数は 30 通であり、その結果は以下の表 2 の通りである。

まず、両者が共通して最も使用した機能的要素はコミュニケーション機能の【3 状況説明】²の[③言い訳]、【4 結論】の[①不可]、【5 対人配慮】の[⑤共感]及び[⑦関係維持]の4つが挙げられる。

一方、両者の間に 5%水準で有意差が見られた機能的要素は、【3 状況説明】の[②情報提供]、【5 対人配慮】の[①謝罪] 及び[③好意的反応]と【7 その他】の[①呼びかけ]の4つの機能的要素である。

表 2 断りの機能的要素の使用回数及び t 検定の結果

コミュニケーション機能	機能的要素	使用回数 (%)	
		JNS	TNS
1 きりだし	①宛名	3 (1.82)	2 (1.36)
	②冒頭の挨拶	5 (3.03)	1 (0.68)
	③話題提示	2 (1.21)	0 (0.00)
2 確認	①情報確認	5 (3.03)	6 (4.08)
	②情報要求	2 (1.21)	1 (0.68)
3 状況説明	①周辺状況	1 (0.61)	4 (2.72)
	②情報提供	0 (0.00)	4 (2.72) *
	③言い訳	26 (15.76)	30 (20.41)
4 結論	①不可	16 (9.70)	15 (10.20)
	②詳細調整	0 (0.00)	1 (0.68)
5 対人配慮	①謝罪	27 (16.36)	16 (10.88) *
	②感謝	6 (3.64)	5 (3.40)
	③好意的反応	21 (12.73)	8 (5.44) *
	④遺憾	6 (3.64)	2 (1.36)
	⑤共感	12 (7.27)	13 (8.84)
	⑥報告期待	1 (0.61)	0 (0.00)
	⑦関係維持	10 (6.06)	12 (8.16)
	⑧会話円滑	2 (1.21)	2 (1.36)
	⑨代案提示	9 (5.45)	9 (6.12)
	⑩共感の促し	0 (0.00)	1 (0.68)
6 結び	①署名	0 (0.00)	1 (0.68)
7 その他	①呼びかけ	0 (0.00)	5 (3.40) *
	②その他	11 (6.67)	9 (6.12)
計		165 (100.00)	147 (100.00)

* : $p < .05$

4.1 JNS と TNS の共通点

上記の結果から、JNS と TNS の有意差が見られなかった項目を述べていく。

第一に、JNS と TNS の両方とも多く使われてい

る機能的要素は[言い訳]であり、JNS は 26 回 (平均 0.87) で、TNS は 30 回 (平均 1.00) である。

第二に、JNS も TNS もほぼ同数で使用されたのは[不可]である。JNS では、16 回 (9.70%) で、TNS に 15 回 (10.20%) で観察された。

第三に、[共感]に関しては、JNS は 12 回 (7.27%) で、TNS は 13 回 (8.84%) 使用している。

最後に、[関係維持]に関しては、JNS は 10 回 (6.06%) で、TNS は 12 回 (8.16%) 使用していることが分かった。

4.2 JNS と TNS の相違点

上記の結果から、JNS と TNS の主な相違点を述べていく。

第一に、有意差が見られた[謝罪]に関し、JNS (平均 0.90) の使用回数が TNS (平均 0.53) より多く観察された ($t(58)=2.297, p<.05$)。使用回数を見ると、JNS では断る側で初出の断りのメール文中に[謝罪]が最も使われ、27 回 (16.36%) 使用したが、TNS は 16 回 (10.88%) しか使っていないことが分かった。また、JNS では 1 通のメールに 2 回以上謝罪したものもあり、30 組中 5 組に観察された。

第二に、[情報提供]に関し、JNS (平均 0.00) の方は全く使用されていなかったものの、TNS (平均 0.13) の方は 4 回程使用されたことが分かった ($t(58)=2.112, p<.05$)。

最後に、[好意的反応]に関し、 t 検定の結果を見ると JNS (平均 0.70) の使用回数が TNS (平均 0.27) より大きく上回ることが観察された ($t(58)=2.254, p<.05$)。また、上記の[謝罪]と同様に JNS では 1 通のメールに 1 回以上謝罪したものもあり、30 組中 4 組に観察された。

5. 考察

まず、JNS と TNS の共通点について述べていく。JNS の使用例を以下の会話例(2)で、TNS の使用例を以下の会話例(3)で示す。

(2) JNS56: 誘ってくれてありがとう～! ヽ

①映画、めっちゃ見に行きたいんだけどね[共感]、②土日とも用事があって[言い訳]③行けないんだ～[不可] ぽっ

本当にごめんね!! っっ

④また今月中で時間ある時行こう? [関係維持] ♪

(3) TNS60: ①俺も超見たいんだけど[共感]、②今週末に実験をやらなきゃいけないんで[言い訳]、③行けないと思う[不可]。④今度にしよう[関係維持]。

以上の会話例(2)と会話例(3)から、JNS と TNS の共通している点は断りの中心部分が[言い訳]と[不可]から成ることが確認でき、カノックワン (1997) や吉田さち (2009) の結果を支持する結果となった。また、その中心部分の前に、相手優先の気持ちが表されている[共感]と、中心部分の後ろに、次に機会があれば一緒に行動したい気持ちを示す[関係維持]の使用が見られた。

さらに、上記の統計の結果から[言い訳]と[不可]は使用される傾向が高く、また、[共感]と[関係維持]は[言い訳]と[不可]の前後に出現する確率が高いが、必ずしも使用される訳ではないことが分かった。ただし、本稿では断りの中心部分である [言い訳]と[不可]を義務的要素とし、また、それらの前後に JNS と TNS が共通に使用する傾向が見られた [共感]と[関係維持]を付随的要素とする。

以上をまとめると、JNS と TNS の断りのメールは義務的要素と付随的要素の 2 つの要素で構成されていることが明らかになり、以下の図 1 のように、義務的要素と付随的要素を使用した断りのモデルにまとめることができる。

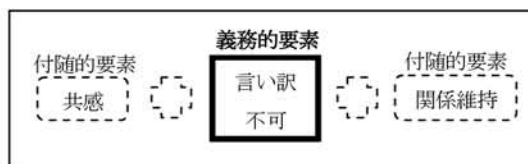


図 1 JNS と TNS の共通点

次に、JNS と TNS の特徴を述べていく。JNS の特徴としては、[謝罪]と[好意的反応]の多用が挙げられる。以下の会話例(4)でその使用例を示す。

(4) JNS48: わーお!

①映画!!! いいね [好意的反応] ^^

でも、今月はバイトいっぱい入ってて

なかなか空いてる日がないから
行けなさそう(；)

②ごめん〜[謝罪](´`)

また、以下の会話例(5)で示しているように、[謝罪]を1通のメールに複数回使った場合も見られた。

(5) JNS30: ①ごめん [謝罪] ☆

中学の友達に呼び出されてるからいけな
いわ → → 6

②ごめんね [謝罪]

この結果から、JNS は断るという行動に負担を感じ、相手が負う「勧誘」行為自体における精神的負担に対し、多く謝罪していると考えられる。その上、JNS は[言い訳]や[不可]という断りの中心部分の前置きとして[好意的反応]を多用し、誘われたことに対して自分が嬉しく思う気持ちを表していると思われる。

一方、TNS は JNS では全く見られなかった[情報提供]の使用が見られ、その使用例は以下の会話例(6)である。

(6) TNS38: 土曜日は先約があるけど、①日曜日は 大丈夫よ[情報提供]😊 どこでいい?

この結果から、TNS は JNS とは勧誘及び断りに対する意識が違い、勧誘場面における断りには相手への申し訳なさを伴わない傾向があるため、JNS ほど謝罪しないと考えられる。その代わりに、自分もその誘いに応じたいという気持ちを表すために、自分の都合の良い時間帯等の情報を提供し、条件が合えば誘いを引き受ける意志を表すと考えられる。

つまり、TNS は人を何かに誘う時に、その行為が面白い・楽しいと思うから、相手も自分と同じように面白い・楽しい経験をしてほしい、同じ経験を分かち合いたいと思い、その行為が自分にも相手にも利益があることを認識していると考えられる。そのため、両者に「お互い持ちつ持たれつ」の意識が高いと考えられる。また、相手からの誘いを受け入

れるかは自由で、誘いを受け入れることは自分にとっても利益のある行為であると考えられるため、「誘い」に対する断る行為において、要望に応えられない罪悪感の概念が低いと考えられる。そのため、相手への配慮を表すための「謝罪」をすることが少ないと考えられる。本研究では、「断り」行為に対し、TNS の「謝罪」の出現率が JNS より少ない結果となり、タイ人と日本人の「勧誘」行為に対する意識が異なると主張したスニサー（2006）を支持することとなった。

以上の JNS と TNS の結果を踏まえて、[謝罪]や[好意的反応]の使い方から見ると、JNS の断りには、相手への配慮が不可欠だと考える傾向があることが認められる。ここで述べた相手への配慮とは、相手の期待に沿えないことへの申し訳なさを示すことにより、相手の精神的負担を軽減することである。また、JNS の[不可]に関しては、日本人の断り方には、「弁明」だけで断りの意図を伝える傾向が強いと報告している吉田好美（2009）³の結果と、相反する結果となった。その理由として、本稿では媒体が携帯メールであるため、相手の顔の表情や声のイントネーションなどから心理が窺えないので、相手への配慮を示しつつも直接的な断り方をする必要があったと考えられる。

一方、TNS は JNS とは上記に述べたように、勧誘と断りに対する意識が異なるため、断り方に違いが生じると推測される。つまり、TNS の断りには自分の都合の良い時間帯等の情報を提供し、相手と行動を共にしたい気持ちを表すものの、相手への申し訳なさをあまり感じさせることなく、しっかりと断りの理由を述べ、勧誘を断っていた。

6. まとめと今後の課題

本稿では、JNS と TNS の勧誘に対する断りを分析し、共通点と相違点を見出してきた。共通点としては、[言い訳]や[不可]が断りの中心部分であり、その前後に[共感]と[関係維持]が見られた。一方、相違点として相手の気持ちを配慮し、[謝罪]や[好意的反応]をする JNS と、明確な断りの意志を伝達しながらも、自分の置かれている状況や都合の良い時間帯等の具体的な情報の提供（情報提供）をすることで相手と深く関わろうとする TNS の違いが見られた。そのため、両者間の円滑なコミュニケーションの実現には、TNS の日本語教育が、双方の違い

に対する理解を深めた上で行われる必要があることを示唆することができる。

今後の課題としては、「断り」発話のみならず、誘う側の応答をも分析対象に含めることで、「断り」のコミュニケーションを包括的に捉えていきたいと考える。

注

1. []は「機能的要素」を意味する。
2. 【 】は「コミュニケーション機能」を意味する。
3. 吉田好美 (2009) では、「JNS のほうが、不可表現使用が少なく「弁明」のみで断る傾向が強い」と述べている。また、その理由として、「「弁明」だけで断りの意図を伝えることが出来ると判断しているからだと考えられる」と述べている。

参考文献

- 稲垣桂 (2007) 「ロールプレイ対話およびメールにおける断り表現：大学生の理由の述べ方を中心に」『学習院大学大学院日本語日本文学』3, 62-84.
- カノックワン・ラオハブナキット (1997) 「日本語学習者にみられる「断り」の表現—日本語母語話者と比べて—」『世界の日本語教育』7, 97-112.
- 熊谷智子 (2000) 「言語行動分析の観点—「行動の仕方」を形づくる諸要素について—」『日本語科学』7, 95-113.
- 熊谷智子・篠崎晃一 (2006) 「依頼場面での働きかけ方における世代差・地域差」『言語行動における「配慮」の諸相』, くろしお出版, 19-54.
- スニサー・ウィッタヤーパンヤーノン (2006) 「日本人とタイ人の「依頼」、「勧誘」行為について—対人関係を維持するストラテジーを中心に—」『三田國文』43, 15-34.
- タブンティナー・ナッタモン&加藤好崇 (2010) 「タイ—日本の日本語接触場面における『誘い—断り』の発話行為」『東海大学紀要, 留学生教育センター』30, 29-41.
- 中村功 (2000) 「携帯電話を利用した若者の言語行動と仲間意識」『日本語学』19(12), 34-43.
- 吉田さち (2009) 「韓国人日本語学習者のメール文における「断り」—日本語母語話者との比較を通じて—」『日本語学習者による言語運用とその評価をめぐる調査研究：「日本語能力の評価基準・項目の開発」成果報告書』129, 259-281.
- 吉田好美 (2009) 「勧誘場面の断りに見られる「弁明」について：日本人女子学生とインドネシア人女子学生の比較 (第 38 回 日本言語文化学会 研究発表要旨)」『言語文化と日本語教育』38, 124-127.
- ルンディエラ・ワンウィモン (2004) 「タイ人日本語学習者の『提案に対する断り』表現における語用論的転移—タイ語と日本語の発話パターンの比較から—」『日本語教育』121, 46-55.
- Beebe, L., Takahashi, T., & Uliss-Welzs, R. (1990). Pragmatic transfer in ESL refusals, In R. Scarcella, E. Andersen, & S. Krashen (Eds.) *Developing communicative competence in a second language*, Heinle & Heinle, 55-73.
- Brown, P and Levinson, S.C. (1987). *Politeness: Some Universals in language usage*, Cambridge University Press.
- めっぐりあんぐらい ぽんていはー／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
yurisuka@yahoo.co.jp

コミュニケーション機能・機能的要素一覧（断り）

コミュニケーション機能	機能的要素	説明	使用される言語表現の使用例	備考
1 切り出し	①宛名	文章冒頭で現れる宛名、受取人名	○○ちゃん(TNS) ○○さん(TNS)	*文章冒頭部分に現れるもののみ。文中で現れる受取人名は「呼びかけ」に分類する。
	②冒頭の挨拶	文章冒頭で現れる定形的挨拶表現	こんばんは(TNS) 久しぶり(JNS)	
	③話題提示	話題・用件について予告	バラキス(JNS) コナン(JNS)	
2 確認	①情報確認	交渉の周辺状況について、誘う側に確認	確かそれ○○の続編だよな?(JNS)	*提案された事情について、相手に確認をとっているもの
	②情報要求	誘う側の提案した条件とは別に、誘う側の都合を伺うもの	いつが空いてる?(JNS)	
3 状況説明	①周辺状況	交渉の周辺状況について、誘う側に説明	聞いたことあるよその映画(TNS)	*条件のものの提示
	②情報提供	誘う側に勧誘を受け入れる姿勢を表し、自分の都合がよい条件を提示したもの	来週ならなんとか行けそうかも(TNS)	
	③言い訳	断りの理由となる自分の状況や心情について、誘う側に弁解	土曜日はバイトで 日曜日は母と○○を見に行くので(JNS)	
4 結論	①不可	直接的な断りの表明	だめです(JNS) 無理なんだ(TNS)	*断りの意をほのめかす、自分の心情に関する表現は「言い訳」に含める
	②詳細調整	用件について、一段条件が定めた上で、更に詳細を調整していくもの	どこでいい?(TNS)	
5 対人配慮	①謝罪	謝罪の表明	ごめんね(TNS) すまぬ〜(JNS)	*逆接が続くものに含める
	②感謝	感謝の表明	誘ってくれてありがとう(JNS)	*逆接が続くものに含める
	③好意的反応	提案された件への好意的反応、または誘う側が提案してくれた事実についての好意的な反応を表明	いいね 映画久しぶりだし楽しそう(JNS)	
	④遺憾	誘う側に遺憾な気持ちを伝えるもの	残念ですが…(JNS)	
	⑤共感	誘う側の誘いに添いたい心情の表出	最近映画見てないので、是非一緒に観たいところなのですが(JNS)	
	⑥報告期待	誘う側からの報告を待ち望む表現	『○○』、観たら感想聞かせてね(JNS)	
	⑦関係維持	誘う側と円滑な関係維持のために社交的かつ礼儀的に振舞うもの	また誘っておくれ(JNS)	*気持ちを表すもので、具体性はない
	⑧会話円滑	会話者の共通の話題で、お互いに会話がスムーズに行われるよう、提示したもの	今はどう? 大学はまだ始まらないよね?(TNS)	*誘う側の質問や、用件とは別の話題についての雑談を含む
	⑨代案提示	提案された件を断る代わりに、代案(別の日など)を提示	来週末とか金曜なら行けるけど、どうかな?(TNS)	*新たな提案の提示
	⑩共感の促し	不本意に断る状況であることに共感してもらうための訴え	今度だけは許して(TNS)	
6 結び	①署名	差出人名の表示	○○(TNS)	
7 その他	①呼びかけ	文章中での受取人名への呼びかけ	○○ちゃん(TNS)	*文章冒頭に現れる受取人名は「宛名」に分類
	②その他	上記に分類されないもの	うん、仕方がないね、早く言ったらいいけどさ〜(TNS)	*あきらめ、非難、送信要求、自分の気持ち、過去に一緒に出かけた時の感想、当惑など

The differences in expressions of refusals between Japanese and Thai learners of Japanese

— Focusing on the structure of refusals when using mobile e-mail —

MEKKREANGKRAI Porntipa

Abstract

In order to increase the efficiency of non-face-to-face communication, especially the refusals situation in which the sender wishes to avoid creating negative feeling to the other party, this study aims to analyze how native speakers of Japanese (JNS) and Thai learners of Japanese (TNS) refuse invitations by focusing on their conversations using mobile e-mail. The results show that both JNS and TNS use “reason” and “direct refusal” as a main structure of their reply. In addition, they tend to add “empathy” to express their feelings of caring for the other party at the beginning of the sentence before the “reason”, while at the end of the sentence they would add a phrase aiming for “maintaining relationships” which is to express the wish to do another activities together if a chance comes up later. In other words, the structure of refusals is composed of “reason” and “direct refusal” as compulsory elements, and “empathy” and “maintaining relationships” as optional elements. Furthermore, the intensive use of “an apology” and “a favorable reaction” can be cited as a characteristic of JNS, and the use of “information providing” can be cited as a characteristic of TNS.

【Keywords】 mobile e-mail, refusals, Thai learners of Japanese

(Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University)